

第5回山形県立図書館活性化検討委員会 議事録

期 日：平成28年2月5日（金）

時 間：14:00～15:20

場 所：県庁1001会議室

1 開 会

2 山形県教育委員会挨拶【渡辺教育次長】

3 協 議【座長：逸見委員長】

- ・冒頭で前回の検討委員会で提示した素案からの追加・変更点について事務局から説明。

(1) 基本計画（案）について

(ア) 追加・変更点について

尾形委員

評価・検証について、第2章に調査結果の概要が記載されており、その後に基本コンセプト、具体的方策があつて、第5章の評価・検証と続いているが、現状を示している県立図書館の総合的満足度（図5-1）を見ると、これだけだと意味がわかりにくい。図書館の利用率が低いことが課題になっていることもあり、有効回答数がどれだけあつて、図書館の利用率がどうなのかについての情報がないと、満足度だけではデータの信頼性、有効性が把握できない。間が飛んでいるので読みにくく、理解をしにくい。第2章（調査結果の概要）の後に第5章（評価・検証）をもつてくると意味合いが変わってくるが、何を意図してということもあるが、工夫できないか。

回答（大場生涯学習施設主査）

第2章ではニーズ調査として、インターネットを利用したアンケート調査と聴き取り調査を実施したが、図書館の総合的な満足度については調査項目になかったため、平成26年度に県立図書館が利用者に対して実施したアンケート調査の数値を記載した。このため、あえて分けて記載したところである。総合的な満足度については、今後も利用者に対して継続的にアンケート調査を実施するなどして、その数値を高められるように考えていきたい。

尾形委員

満足度について、上述の調査概要がないとデータの信頼性がない。第2章のニーズ調査と一緒にのものと誤解した。別の調査であれば、有効回答数等の調査の概要を記載しないと誤解が生じる。利用している人の満足度であれば、インターネットを利用したアンケート調査での利用率が44.3%だったことなどの情報を入れたりなどして流れが必要。

大沼委員

多様な主体との連携について、P14本文には「読み聞かせや子育て団体（中略）、多様なグループ…」の文言があつていいと思うが、P15具体的方策の体系においては、読み聞かせや子育て団体のみの記載になっている。2つの団体も大事であるが、これら以外にも

多くの市民団体があるので、様々な団体と連携して行ってほしい。また、県立図書館と繋がってみたいと考えている団体がいろいろあると思うので、広く協力できるようにしてもらいたい。図書館本来の機能にとどまらない多様な賑わい創出の仕掛けづくりを検討することは良いと思う。

回答（大場生涯学習施設主査）

指摘のとおり、P14 ではもともと具体的な団体に断定した書き方になっていたのですが、多様なグループという文言を追加した。P15 の記載は検討する。

新藤委員

数点指摘がある。1 点目、郷土資料等のデジタル化と公開について、最近、公共図書館等で歴史的な古文書や資料の公開がかなり進んでいる。本を開いたときの画像がインターネットで見られるところもあるが、もともと本の のど（頁と頁の境目）に文字がかなり詰まって製本されていて、デジタル画像を見てのどに近い行の文字が読めないといったこともあるので、工夫して公開してもらえると、研究者等の手間暇が削減されると思う。中にはただ公開しているだけで、全文が読めないだろうという図書館もあるので作成の際に考慮してほしい。

2 点目、ポータブル型の貸出処理端末機器の導入検討は大変素晴らしいと思う。庄内地方等での出張イベントのときに図書を貸出した場合、返却はどうなるのか。直接、県立図書館への返却となるのか、それとも最寄りの酒田市や鶴岡市等の地元の図書館での返却となるのか。

3 点目、高齢者向けの大活字本の取り組みは、前から指摘しているが、ニーズがあるものとして評価できる。

4 点目、県内企業との連携による地元製品の展示・即売、講演会の開催、産直市の開催は、図書館でこれまであまり考えられなかった新しいことをやるということで大変評価できる。これは県民だけではなく、県内を観光に訪れている人向けにもやった方が、山形県のアピールにもなると思う。基本的に図書館は地元の人しか行かないところで、観光で来る人は博物館に行っても図書館には行かないので、いかに観光客を図書館に呼び込むかということについては具体的な案はあるのか。

5 点目、図書館内での書籍や雑貨等の物販について、書籍とはどういう本を置くのか。博物館では昔からミュージアムショップがあって、図書館は図書館法の規定で無料が原則なので販売はあまり考えられてこなかったが、最近千代田区等の図書館ではライブラリーショップが設置されていて、図書館オリジナルのグッズや、併設する博物館で展示している図録等を販売している。県立図書館も書店で購入できる本ではなく、山形県独自の郷土史に関する本や、そこでしか買えないようなオリジナルティあふれる本を売った方がよい。雑貨も図書館オリジナルのグッズを作って売ったらいいと思う。

回答（大場生涯学習施設主査）

1 点目について、単に公開にすることで終わることではなく、利用者がきちんと読めるようにということに留意して進めたい。

2 点目について、県立図書館から離れた場所での対応とのことだったが、運用面については現時点で検討していないが、利便性を考えれば地元の図書館に返却ができて、相互貸借のような形で本をやり取りすれば、利用者にとってはよいのかと思う。可能かどうか利

用者目線でこれから検討したい。

4点目について、地元の人だけではなく観光客を呼び込むような施策といった視点は、参考にさせていただきたい。今後、ソフト面の充実を検討する際に活かしたい。

5点目について、物販のイメージは、千代田区立日比谷図書文化館のようなライブラリーショップであって、カフェなどもあり、その中でオリジナルのグッズやちょっとした書籍を売っているといった事例もあるので、参考にして県立図書館でも何かできないか引き続き検討していきたい。

回答（山田副館長）

ポータブル型の貸出処理端末機器について、現在でも市町村図書館への図書の一括貸出において、県立図書館の本を、鶴岡市立図書館が鶴岡市民に貸したり返却を受ける運用例があるので、同様の形で地元図書館への返却することは可能であると考えている。

逸見委員長

県立図書館の利用登録をしていない場合どうなるか。

回答（山田副館長）

本を借りるためには利用登録が必要で、先に利用カードをその場で作成してもらうことになる。

逸見委員長

一人でも多く利用登録が増えることは望ましいと思うので、スムーズに対応できるようにしてほしい。

岡崎委員（代理）

評価・検証について、基本計画においてはこの文言でいいと思うが、改修するまでに期間があると思うので、もう少し現状把握のための調査を実施してはどうか。改修が終わっているいろいろなプログラムやサービスが提供された状態で、どのようにサービスの満足度が上がったとか、使い勝手が良くなったとか、調査のビフォー・アフターをはっきり分かるようにするためには、おそらく改修後だけではなく、今の段階でも現状把握のため再度調査した方がよい。しっかりしたデータがないとのことで比較しにくいと思う。現状としてデータがないのであればやった方がよい。

多様な主体と連携した賑わいを創出する仕組みづくりについて、連携という言葉からもう一歩進めて、県民・市民協働というところで、より多くの人たちがこの場所を自分たちの場所として感じて活動してもらえるような仕組みづくりに発展するとよい。連携と協働の言葉にどれだけ意味の違いがあるかもあるが。

また、大学コンソーシアムとの連携について、連携はコンソーシアムに限定するのか。大学とも個別に連携するのであれば、大学・大学コンソーシアムとの連携として、必ずしもコンソーシアムが窓口になる必要はない。情報がコンソーシアムから大学に上がってこないこともある。

物販、イベント等の図書館の本来機能とは違う賑わいづくりをやるのであれば、マーケティングだったり、どのように見えるかというデザインの部分が重要になってくる。全般的にデザインのクオリティの話が記載されていないが、基本計画とするならば多くの人が共感し、この場所に行きたいと思うようなデザインのクオリティも文言の中に入れていけばより設計者に伝わると思う。

回答（大場生涯学習施設主査）

現状把握について、どういうことが考えられるか、基本計画に盛り込めるかについて、持ち帰って検討したい。

多様な主体との連携について、協働という言葉もあるとのこと、書きぶりについても検討したい。大学コンソーシアムとの連携について、個別の大学と連携しないという趣旨ではない。

デザインのクオリティとは、どのようなことかももう少し教えていただきたい。

岡崎委員（代理）

基本計画を読んで設計者が設計案を提案してくると思うが、場所そのものがブランドになっていかないといけない。物販の中で図書館のオリジナル商品が販売されることはいいが、トータルでのデザインの監修やブランドとデザインのコントロールがおそらく必要になってくると思う。賑わいがあるからといって何でもかんでもそこで販売するのではない。誰がコントロールするのかという問題が出てくるだろうと思う。基本設計・実施設計において、この部分はこういうソフトの仕組みやデザイン監修者を置くといったところを提案してもらえれば、コントロールできる。基本計画はこれから設計をする人にとっては、すごく重要なもので、ここからいろいろなものを読み取っていくと思うが、そうした提案をしてもらえるのであればデザインの面でより良い空間であったり、良い商品、良いサービスが出てくると思う。もしかしたら他の美術館や図書館の基本計画の事例の中でそうした文言があるかもしれない。

（イ）全般について

尾形委員

県内企業と連携について、講演会は良いと思うが産直市の開催まで広げて、広がりを持たせて観光客も呼び込むという話があった。広がっていくのは良いことでもあるが、一方でやみくもに広げると、本来の機能がぼやけてしまい、基本コンセプトがぶれると思う。どこまでの広がりか、基本計画の中でイメージさせるものが追加され、逆にわからなくなった。やるのであれば最初から重点的に入れるべき。コンセプトと関わってくるころだと思ふ。図書館の蔵書のジャンルの話やどこを強化して書籍を揃えるか。例えば県立図書館と市町村図書館の位置付け・使い分けについて最初に議論になったが、県立図書館が市町村図書館を補完する機能を持つが、幅広くいろいろな人に利用してもらわないといけないとなると蔵書は広く浅くになりがちという話もあった。私は、県立図書館らしい専門書を拡充した方がいいと個人的には思う。最後にこうした話が出てきたが、仮に食品の産直市をやるのであれば、山形県は食に力を入れている、食にちなんだ県であるといった県としての大きな枠組み・施策に沿ったものとして、図書館の位置付けがあって、図書館がその一部の機能だというコンセプトを出して食や農の書籍を充実させていくと、もっと特徴が出る。外からわざわざ訪ねてきてもいいくらいの山形県立図書館のコンセプトも中身も作れる可能性をもっと出せるし今回設置を検討しているカフェも活きる。当初は議論の中で、広くいろいろな人を対象にするがために、あまり特徴を強化するよりも、今回どちらかというとかフェ機能等に着目したリニューアルの視点の議論が多かったのではないかな。そうではなく、それをきっかけにして図書館の機能を見直し、特徴を出して魅力的にしようと思ったら、むしろここがもっと議論されて、もしかしたら基本計画の後の詳細計画や

次期の基本計画になるかもしれないが、求められる図書館のあり方、山形県らしい図書館のあり方を考えることができたかもしれない。食品・食に関する、郷土の食・一般的な食に関する書籍がどこよりも充実していて、産直市までやるとつながっていく。そういう関連があると夢が広がるという想いである。

大沼委員

基本計画に可能性を感じる。これまでの議論で出されたアイデアをどうしていくかについて、デザインをする人のバランス感覚が関わってくると思う。

新藤委員

図書館の本来機能に加え、こうした企業と連携した取り組みについて、図書の充実を無視して、地元製品の展示・即売だけやるのであれば他の施設になってしまう。当然、図書館は図書を充実させる必要があるが、最近の図書館の動向を見るとそうではない。図書館に本がたくさんあって、本をそろえて待っているだけでは利用者はあまり来ない。図書館の従来の機能でないもの、斬新なものをいろいろなところが打ち出してきていて、それなりに成功している。製品の展示・即売、講演会とか産直市はかなり将来的な話だと思うが、やるということもそれはそれでいい。図書館の本来機能は本であるので、産直市をやるにしても例えば米沢牛とかラーメンとかさくらんぼであるとか、農業に関する本と同じようなコーナーに置いてあって、さくらんぼを売っている、さくらんぼにまつわる小説・絵本、農業に関する専門書があるとか、本でないものを中心にして多様な本につながっていくような展示方法を考えるといいと思う。

図書館のやりすぎについて、図書館なのか生涯学習館なのか書店か古本屋かわからなくなることが起きている。インドの図書館学者ランガナタンがとなえた図書館学の五法則のうち、第五法則に「図書館は成長する有機体である」という言葉がある。図書館を有機体である生物に例えて、図書館がどんどん進化していくというもので、固定観念にとらわれずに、積極的に新しいことを時代の要請を受けてやらなければならないとしていて、世界中の図書館の基本のコンセプトになっている。歴史的にみると図書館の機能は、昔はひたすら本を保存して、後世に伝えるだけでよかった。利用者は基本的に来なくてよかった。素晴らしい本を保存するのが図書館の機能であったが、1930年代にアメリカから始まったが、利用を中心にする図書館になり、日本は1970年代から日本図書館協会がとなえる「市民の図書館」という考え方になり、図書館の役割機能が保存から利用に変わってきている。最近新しい機能として、図書館はどんなことができるのか、模索の時代に入ってきていると思う。図書館の機能から逸脱していると思われるようなものもいろいろなところがやり始めていて、失敗するところもあれば成功するところもある。本や図書と結びつけることになるが、思い切ったことをやるので、それなりに価値や可能性が広がると感じた。

岡崎委員（代理）

来館者数を増やすだけのイベント開催では、本末転倒になる可能性がある。そこをどうつなぐのかが問題となる。所属する株式会社 studio-L では、立川市子ども未来センターの中の立川まんがぱーく（有料で漫画が読める施設）を運営しており、そこは子どもの支援や市民協働の支援といったいろいろな機能がついている。図書館の中の人が企画するの

ではなく、市民協働の担当者が漫画を使って企画をするということをしている。例えば、「食べる」ということについて、いろいろな漫画が出ているが漫画を活用しながら食と結び付けてイベントをすることで人を呼び込み、さらにその漫画にも興味をもってもらい段階を経て、本・漫画と市民をつなぐことを考えている。そういう視点をもつ人が必要になってくると思う。単に賑わいや人が来るということだけになると、どんどん本とかけ離れてしまい、本と関係のないところで循環が終わってしまう。そういうことができるようなコーディネーターや企画ができる人を置くべき。山形だと木を使ったモノ作り、食の分野・郷土食、山形ならではの食べ物だとか見えてきやすいが、それをどうやって本とつなげていくかを前提にしながらやっていくといいと思う。この基本計画の中でどこまで読み取れるかもあるが、食は山形にとって大きな切り口なので、みんなで食べるキッチンがある等そういうことももしかしたら考えられる気がする。いずれにしても物販は、ミュージアムショップの図書館版のイメージができるが、イベントをどうやって本とつなげるのか、それを誰がやるか重要なので、仕組み作りを設計者に提案してもらいたいと思う。

逸見委員長

基本になるのは誰のためになぜ図書館の改修を進めるのかということである。一人でも多くの利用者に活字に目を通してもらうようになり、新規の利用者にも図書館に来ていただくことを考えて、そのためには何をしなければならないかを考えながら、今後進めていかなければならない。

今回の意見を踏まえ、修正、追加のうえ、検討委員会として最終的な基本計画（案）を教育委員会に後日提出したいが、委員長に一任させてもらいたい。

(ウ) 今後の進め方等について

説明（大場生涯学習施設主査）

- ・基本計画（案）について、今回の検討を踏まえて適宜修正のうえ、逸見委員長から県教育委員会に報告いただく。教育委員会としては、関係機関との調整や最終的な確認等を行った上で、山形県立図書館活性化基本計画として、年度末までに策定し、公表する。
- ・県立図書館等の改修に向けた基本設計・実施設計を平成 28 年度から 29 年度にかけて実施する。プロポーザル方式で業者を選定する予定であるが、設計には基本計画の中の「大規模改修の実施」の内容を反映させたものとしたい。
- ・ソフト面の充実策については、継続して検討していく。まだまだこれから検討が必要と考えており、図書館本来の機能を大事にしながら、より具体的な方策を検討していくために、幅広い分野の有識者を活性化アドバイザーとして委嘱し、意見をいただきながら検討を進めたい。
- ・お知らせとして、県立図書館の活性化事業の 1 つとして取り組んできた IC タグ・ゲートの導入について、2 月 25 日より運用を開始する。図書館に IC ゲートが設置されることにより、館内への手荷物持ち込みが可能となる。手荷物のコインロッカーへの預入が不要となり、ニーズ調査でも意見の多かった預入のわずらわしさが解消される。今年度は開架図書に IC タグの貼付が完了したところで、来年度以降は閉架図書への IC タグの貼付を実施していく。

尾形委員

どんな本を揃えるのかということと一緒に考える必要がある。どこまで特徴を出すのか、広くいろいろなものを揃えて万人向けにすると特徴は出ない。特徴を打ち出すことと、県民に広く浅くということは全然違うと思う。個人的には特徴を打ち出してほしいと思う。広く万人向けだと各市町村に設置されている図書館と類似したものになりやすい。新しい機能が備わったり、リニューアルすると一時的に人は増えるが、定期的に使う人は増えにくいと想定される。なぜなら、活字で本を読むということから、インターネット経由で情報をとる時代になり、いろいろなメディアにおいて使う人が減って問題になっている中で様々なこと考えていく必要がある。図書館は本を保存する、それが発展して本を貸し出すことになったという話があったが、そこも変わってくる。図書館は情報拠点だと思う。人や情報が集まる所は発展するところであるが、そのためには他との差別化やより多くの情報をどう貯め込むかが非常に重要である。鶴岡市立加茂水族館も同じで、もしクラゲに特化しなかったら今のような盛況な状態ではなかった。特化することによって、もともと望んでいた広く多くの人を県内外から呼び込むということができている。マーケティングの考え方も同じで、ターゲットを絞り込んで価値を明確にするからこそターゲットにした人たちに影響されて周辺の人たちも集まってくる。より広く万人向けになってしまうと、価値がわかりにくくなって誰にとっても中途半端になる。最後に良い3行（図書館本来の機能にとどまらない多様な賑わい創出の仕掛けづくりの検討）が加わったと思うが、もっと議論が必要で、基本コンセプトも変わっていたと思う。これまでコンセプトについて意見を申しあげたが、もっと特徴のある、はっきり価値の伝わるものになるとイメージの仕方が全く変わる。地域の中に成功事例もあるので参考にしてほしいし、今日だけでは議論し尽くせないので、時間をかけて検討してもらいたい。

大沼委員

これからもソフト面の充実を引き続き検討していくということでよかった。これから設計に移るということで、設計をする人はハード面だけでなく、ソフト面を一緒に考えていける設計者を選んでほしい。施設を利用するのは県民なので、県民も参加しながら設計できるプロセスにしてもらいたい。地元の学校も一緒に協力していく話が「ひろがる図書館」の中に入っていたが、学生やお店等を絡めてまちづくりをしているところもある。まちづくりや建築もできる学校が山形に貴重な資源としてあるので、より連携して図書館づくりをしていけば、全国的に見ても珍しい、面白い事例になると思う。図書館を軸に人が集う、素敵な図書館になると思う。

新藤委員

基本が図書館であるということをお忘れしないようにしなければならない。図書館の斬新なサービス、賑わい創出に関して今までの常識にとらわれない新しいサービスをやらなければならない時代になってきていると思う。斬新なサービスをするがゆえに図書館本来の機能がなおざりになっているところもあり、問題になっている。もう一度図書館とは何かを肝に銘じていかなければならない。図書館が必要かという根本的な疑問について、研究者も答え切れていない。例えば、病院は誰にとっても必要なもので整備について反対されることはない。一方、図書館の場合は、税金の無駄遣いではないかという意見を言う人もいる

わけで、そういう人たちに対して図書館はなぜ必要なのか、なぜなければならないのかを明確に説明できるかという、究極的には研究者でも答えを出し切れていない。

図書館は昔は保存の機関であって、利用を主体とするのはここ 40 年間くらいで、2000 年に入ったくらいからは、紙媒体の本がそろそろなくなるということで電子書籍をどうするのかとか、そもそも本ではなくその中の情報を扱うのが図書館の役割ではないのかというように考え方が変わってきた。では情報は何かというと CD や映像、デジタル情報全部だが、図書館はどこまで収集しなければならないのかということも議論になっている。国立国会図書館はインターネットのホームページも収集・保存しているし、そういう機能もある。では博物館との接点はどこにあるのか、博物館はずっと物を収集する機能をもっているが、その兼ね合いがどうなるか。生涯学習をやろうとすると生涯学習機関とはどうなるかということがあって、図書館の役割がどこまで求められるのかわからなくなっている。現在としては、紙媒体の本の売り上げが減少しているといっても明日明後日とか来年になくなるわけではないので、紙媒体の本を中心としてどのような斬新なことができるかを考えていくのがいいと思う。

岡崎委員（代理）

これから基本設計・実施設計を進めるとのこと、基本計画は重要な土台になる。これを踏まえて設計者が提案すると思うが、その設計の実施要領の中に基本計画の中で盛り込んでいるようなソフトの部分の可能性を入れていくことがすごく重要だと思う。例えば多様な団体・主体との連携を取っていくためには、どのようにハードとソフトで連携しながらやっていくのかそういうところもしっかり提案できる設計者、専門家が入った企業共同体になると見込まれるが、実施要領の作り方も重要。その実施要領でどれだけメッセージが伝えられるか。審査委員のメッセージがどうなるかもすごく重要になる。それに感応して設計者が応募してくることになる。

さらにソフトを考えると、図書館とは何かということを専門家でも、当検討委員会でもなかなか明確なものが出せないが、多分、図書館に情報だったり、知が集積していて、それに触れて、県民・市民が成長していけることだとぼんやり思うが、そういう議論に県民を巻き込んでいく必要がある。巻き込まないと県民自身の意識が、図書館はわからない、難しい本がたくさん並んでいて自分に関係ない世界とってしまう可能性もあるので、もっと図書館はどうあるべきかを考えることを県民に投げかけることも必要。設計の段階からこの施設は県民のものであるという主体者意識、私たちはどう関わられるのか、団体そのものが考えるようなチャンスを持たせる必要があると思う。そういうことを studio-L がやっているが、モチベーションがない人たちに連携しようと言っても実際には連携できない。このモチベーションを施設ができてから生み出そうとするのではなく、作っている最中にどれだけ生み出せるかが重要。実施要領で設計に市民の意見を引き出すような設計プロセスを提案しなさいとか、完成した後に市民協働がどのように進められるのかをソフトの部分で仕組みづくりを提案しなさいというような実施要領が重要になってくる。この基本計画で作ったコンセプトは、図書館機能に盛り込みたいことを分かりやすく作った感じがするが、さらにその先を、もしかしたら簡単には生まれてこないがみんなで創っていくこともある種のコンセプトなのかもしれない、学び続けるという意味でもコンセプトになるのかと思う。

逸見委員長

館長は、目をつぶってみて遊学館をイメージしたときにどのような光景が浮かぶか。

回答（板垣館長）

ハードについては、これからどのような設計条件を出して発注するかにも関わるが、とられてイメージするよりはこれから県民と一緒に作っていくものと思う。現場を預かる図書館としてはハードもそうだがソフト面をいかに充実していくか大事だと考えている。ソフト面については、26年度末に山形県図書館協議会で様々な改善策をもらったところだが、大規模改修と並行して手をつけられるところから、改善していくことが大事だと思う。

逸見委員長

今年になってから県立図書館に何回か行ったが、雪のこともあったが、あまり利用者がいない状況だった。目をつぶってみても利用者が浮かばない状況で、本来は図書館の中にいろいろな子ども、高齢者や若い母親たちがたくさん集って、楽しそうにもしくは真剣に本を読んでいるという光景が浮かべばいいが、今の遊学館では浮かばなかった。せっかく機会を得て、検討委員会としてこれまで検討してきたので、これを活かさないわけにはいかないと思う。そのためには、山形県立図書館はどうして必要なのか、何が今足りないのか、何を情報発信をしていくのか、誰のために改修して、それで何が生まれるのかを考えていってもらいたい。基本計画を元に今後進んでいくので、一人ひとりが目をつぶったら、絵・造形が浮かぶような進め方をしてもらいたい。

(2) その他

質疑特になし

4 閉 会